

# 集

俳句フォーラム

2022年7月 第84号



金目鯛

仁上博恵

志と賀状はみ出す墨の跡  
日の射して春先取りの小さき花舗  
初日の出ビル解体も染めあげて  
菜花一面カレンダーを剥ぐ如く  
金目鯛煮付け上々彼岸かな

居場所

大山夏子

パソコンの椅子が居場所や年明けて  
すれ違ふ人みなやさし小正月  
古日記書かざりしこと鮮明に  
どこからか？梅の香の漏れ来たる  
観覧車空っぽのまま春を待つ

梅の宿

石川東児

春めくや出船の濤のきらめきて  
もう暫し睡りにゐたし梅の宿  
鬼の豆撒けども食めぬ歳男  
二月の一湾の風帰り舟  
臘梅やニンフ何処かに蹲る

ひとり

瀬戸美文

冬茜スカイツリーも吾もひとり  
冬銀河語るに足らぬ十年か  
過去の意味問う夢を見て春愁  
何年ぶり木挽町に来て春隣  
母の背の小さくなりて日向ぼこ

三省や

日置瀬魚

葉は枯れて地に還りつつ木を護る  
大マスク破れジーンズで誇示して  
屠蘇に酔いその日最後の三省も  
寒禽は孤高なりけり富士遠き  
出損なうくしゃみ長引く災禍かな



平和

渡辺節子

青空と黄花に祈る平和な世  
花吹雪友掻い潜るロケット弾  
限りないひまわり畑焦土なり  
バンドウラ抱き翁散る春の野に  
国破れ異郷の奇寓春の月

杖が友

大山夏子

人恋し真昼雪降るしんしんと  
人日人を人に会わずに早寝かな  
裸木の枝に注がる月明かり  
探梅や一人歩きの杖が友  
白木蓮の今白濃くさびし友転居

将棋

江口九星

将棋負け濃い茶入れて春の空  
白葱の白さ増して寒さ行く  
名残雪燃える入日に紅となる  
蟬梅や透けて朝日の柔らかさ  
水仙の叢に月光幻想へ

寺の手桶

中川のぼる

淑気満つ樹齡重ねし杉古木  
去る冬の右折左折し迷いおり  
冬の星酒飲みながら嘘真  
彼岸会や遍く人の無為を聴く  
七七日寺の手桶も水温るむ

濃茶

伊藤昌枝

買初は今年もやはり文庫本  
いにしえの淡海渡る風寒し  
まんさくの花縵れ解けて水の音  
強東風や不意をつかれし真夜の地震  
楽茶碗を回す濃茶やうららけし

お年玉

吉宇田麻衣

準備した今年も使わぬお年玉  
不自由が自由となつて冬の空  
冬散歩倉庫にかわる工場かな  
夕暮れの景色ひと息師走かな  
庭先の光つた霜は跡かたも

氷柱

楠本和弘

氷柱から訛り漏れくるみちのくの  
雪垂る竹藪雀らの集ふ  
淡白も男伊達なり鱧船  
雀の巣見つけてはさむ夕餉かな  
突然に羽音反転春一番

青春の夢

渡部恭子

春光も花のかたち刺繍して  
立ち漕ぎを覚えし君に風光る  
桜餅で退院祝うほのぼのと  
枝垂梅濃淡かさね生き様の  
青春の夢のせる春ギターの譜

リヤカー

小澤えみ子

初御空機影キラキラ光りけり  
晩学の背筋を伸ばす寒の内  
七福神の二神を残す初詣  
春風ものせリヤカーの宅配便  
濃紺の制服すがし子らの春

火の鳥

酒井たかお

雪だるま石塀の上一列に  
淡雪に花芽埋れて息吹せり  
共に古い野遊びのあと万歩計  
股から覗く房総の春の海  
春の鷗入日が染める火の鳥に

命

由良則子

初鳥言祝ぐ声の清々し  
初暦色分けをして書き込めり  
伸び代を期待してひく初みくじ  
父母許へ銀河鉄道春の夢  
戦下に生るる命尊し春の闇

悪寒

高畑太朗

軟口蓋ピリピリとして冬曇り  
痛む喉に鍋焼だけのすきまあり  
綿棒の痛み末冬の陽性  
指先のオキシメーター春を待つ  
侵略と祖国男らの春憂い



白山句会

友の訃

都築繁子

友の訃や白木蓮の散り敷きて  
ふりむけば共に声あり花吹雪  
水槽に花屑めだか自在なり  
花冷えや厚い肌着の並ぶ店  
声を出すお口の体操のどけしよ

春の闇

大山夏子

春雷の俄かにひびく頭越し  
三月の別れ続けり友もまた  
庭に無期椿も目高も視野のうち  
三月の訃報さよならは早すぎる  
再びの声聴かせてよ春の闇

